琵琶湖における船上からの陸地景認識に関する研究

A Study on the Cognition of Landscape Viewed from Ship in the Lake Biwa

卯田 宗平*

Shuhei UDA

摘要：本研究は、山アテ行為で用いられる陸地の景観と付与呼称との関係に着目し、①船舶の定位作業で陸地景をどのように認識しているのか、②如何なる形状に対して何を連想しているのか、③視対象の形状を契機とする相貌的語彙の多少差が名づけ行為にどのような影響を与えているのかを明らかにする。

その結果、①漁師は陸地景に対し全体から部分へと視認範囲を絞り込みながら船舶をより正確に定位している。②陸地景に対し身体や道具といった身近なものを相貌しながら簡易に認識している。③視対象に対する相貌的語彙の多少差が、「山」型には「もの」的表現、「崎」型には「こと」的表現という付与呼称の表現の違いを生じさせていることを導き出した。

1. はじめに

視覚的に平滑な水上では、自船を定位するための手がかりが極めて乏しい。しかし水上での漁業活動では、自船の定位をはじめ好漁場の位置や障害物の判断など、どうしても的確で俊敏な位置測定が求められる。そのため、水上を生業の舞台とする漁師は、船上から見て取れる陸地景のほか、月や星座などの天文現象、雲や風などの気象現象、波などの海洋現象といった様々な自然現象を援用しながら操業を行っている。なかでも重要なのが陸地の景観に対する視認行為「山アテ行為」¹⁾である。

従来、船上における景観体験を取り扱った論文は少ない。とりわけ山アテ行為は、船上において水域と陸域とを対応させて認識するという特異な行為であるため、これまで民俗学や地理学を中心に注目されている。

そのなかには漁業文化や慣行を解明する過程で山アテ行為を取り上げている民俗学のアプローチの例(桜田²⁾、田中³⁾)や、山アテ行為を通じて人間の知覚環境の解明を試みる地理学のアプローチの例(斎藤⁴⁾、斎藤・関⁵⁾)、山アテ行為の技術から人と環境との関わりを明らかにしようとした例(篠原⁶⁾、五十嵐⁷⁾)、また山アテ行為を含む船上での景観体験を既存の文献から抽出・整理している斎藤⁸⁾や山アテ行為で用いられる陸地景の形態を明らかにした卯田⁹⁾がある。とりわけ卯田は、山アテ行為で使用される陸地景を抽出し、その形態を類型化した結果から、船上より注目されやすい陸地景の特徴を明確にしている。つまり船上から「どのような陸地景を見ているのか」また「何が目立つのか」を明らかにしている。

しかし、従来の研究では目立つ地形を抽出し整理することを目的としているため、船上から見て取れる陸地の景観をどのように認識しているのか、という問題はほとんど論及されていない。

そこで本研究は、“船上では如何なる陸地景をどのように認識しているのか”という問題を主眼に置いた「空間認識論」の立場から、山アテ行為で用いられる陸地景の形状とそこに付与されている呼称との関係に着目し、船上からの陸地景認識の特徴「船上から陸地景をどのように認識しているのか」を明らかにする。

具体的には、①船舶を定位する過程で陸地景をどのように認識しているのか、②漁師たちは陸地景の如何なる形状に対して、何を連想しているのか、③船上から見て取れる「山」もしくは「崎」を契機とする相貌的語彙の多少差が、名づけ行為にどのような影

響を与えているのかを明らかにする。

本研究が取り扱う陸地の山々に付与された呼称は、船の移動に伴う陸地景の継起的变化や特徴の一瞬、また陸地景の形状を分かりやすく表現したものが多く、水上における新たな視点場の発見や陸地景の見方を提供するという観点において風景計画のための基礎的な知見になると考える。

2. 研究の手順と調査の概要

本研究は、まず調査対象地域への聴き取り調査によって漁業活動で用いられるアテ呼称¹⁰⁾を収集する。そして、収集したアテ呼称と山アテ行為で使用される陸地の景観、また船舶の定位作業を行う際の漁師の視認行為を手がかりに、船上からの陸地景認識の特徴を明らかにする。

調査対象地は、予備調査において漁師の山アテ行為が確認できたことを理由に、琵琶湖内の沖島(滋賀県近江八幡市沖島町)を選定した(図-1)。沖島は、琵琶湖のほぼ中央に位置し、面積1.5平方km、周囲6.8km、世帯数151戸、人口507人(男性245人、女性262人)(いずれも平成11年度)であり、琵琶湖内で最大の島である。

調査内容は主に、琵琶湖沖島で漁業活動を行っている漁師96人¹¹⁾を対象に、船上から視認する目標物やそこに付与された呼称などを実際の陸地景と対応させながら聴き取った。また、国土院発行の国土基本図・地形図を基にしながら、抽出された陸地景の現地踏査を行い、それらへの観察や写真撮影等による補足調査も実施した。

図-1 琵琶湖沖島の位置

*総合研究大学院大学文化科学研究科

3. 山アテ行為にみる船上からの景観認識

(1) 陸地景認識プロセス

本項では、漁師が行なう陸地景に対する視覚的働きかけに着目することで、彼らが船舶を定位する過程でどのように陸地景を認識しているのかを見てみる。図2は、通常行われる船舶定位作業と陸地景への視認行為を模式化したものである。

まず、漁師が水上で定位作業に入るとき、「～の方向を見る」というように、山並み全体を大掴みに確認する「図2①」。これは自船が今、おおよそどの地点にあるのかを陸地景の形姿や海岸からの距離感から把握しているのである。この段階で使用される呼称の指示範囲は広く、なおかつ陸地景への注目範囲も広い。

次いで彼らは、大掴みに把握した山並みの中から、山群内部の個別山容や変化に富んだ山並み稜線といった船上から特に目立つ地点に視認する先を移す。その稜線の変化を大きく頂部「テッペ」、稜線傾斜部「カタ」、鞍部「ザワ」の3部位に分節し、定位に使用可能となる顕著な地点を探し出す「図2②」。

そして、さらに稜線傾斜部「カタ」に目立つ変化が見て取れたとき、「カタ」部をさらに「ノボリカタ」「クダリカタ」というようにより細かく分節し視認する「図2③」。頂部や鞍部の場合でも、より細かく分節し視認する。最後に、視認した地点とあらかじめ選定しておいた目標物との見かけの位置関係を割り出し、見通し線を引いてくるのである。

このことから、定位しようとする漁師は、陸地景の輪郭線の特徴が変化する地点で分節化し、それを一つの単位として、その部分に適切な呼称を付与し認識していることがわかる。そして、彼らは、陸地景の全体から一部分へと視認範囲を絞り込みながら、より正確な船舶の定位を行っていることが分かる。

図-2 山並み稜線への視認範囲と船舶定位レベルとの関係模式図

(2) アテ呼称にみる陸地景認識

(i) アテ呼称の命名主因

本項では、アテ呼称の命名主因に着目することで、漁師が陸地景に対し何を根拠にどのような呼称を付与しているのかを明らかにする。収集されたアテ呼称を呼称の命名主因別に分けると、「表1」のような5つのカテゴリーに分けることができる。

通称名に基づくタイプには、長命寺や八幡山、岡山、北之庄山など計11語があり湖岸周辺の農民とも会話上で共用している。視認対象物の形態からの類推に基づくタイプには、沖島周辺で計11語ある。いずれも漁師独自の呼称であり、視対象が有する形姿への連想体験に基づいている。

対象物の形状や分割状態を表した呼称には、湖中から望見すると断崖のように見える地点「キリカケ」や「ニッ目ボンサン山」や「三ッ目テンジョウ山」というように、山並み線を分割する際

に使用する数を示す表現もある。これは、二ッ、三ッというように隣り合った目標物の呼称を借用し、数を形容して認識しているのである。

また、その地点の出来事やエピソードなどの故縁によるものが少ないながらも。沖島周辺では、「火焚場」「蜷ヶ崎」「鯉ヶ崎」「見立崎」がそれにあたる。夜間や天候が悪い時、出漁中の漁師に陸地の位置を知らせる目的で火を焚く場所を「火焚場」としたり、蜷が多く獲れる地点に近い崎を「蜷ヶ崎」などとしている。いずれにしても、アテで使われている呼称には、少ないながらも故縁に基づくものがある。

このように漁師は、農民と共有している呼称以外にも、彼ら独自の呼称を用いながら、陸地景をより簡易に認識していることが分かる。アテ呼称が付与されている位置情報と、アテ呼称のなかで漁師独自の呼称の位置(◎部)を示したのが図3である。著者が調査(現地・文献)した限りにおいて、漁師独自の呼称が付与されている地点に農民は呼称を付与していない。

表-1 アテ呼称の命名主因

	命名主因	使用されている呼称
農民と共有	通称名に基づくもの	八幡山、堀切、長命寺港、岡山、北ノ庄山、鍋島、川口、宮ヶ浜、小豆ヶ浜、伊崎、尾山の計11語
漁師独自	形態からの類推に基づくもの	大マタ、ボンサン山、カシラ山、コブ、ナベ山、カサホコ山、マヒゲ、テンジョウ山、ボタモチ山、クソツボ、ヤマハナの計11語
	形状や分割を直接形容	キリカケ、ニッ目、三ッ目、小山の計4語
	出来事・故縁	火焚場、蜷ヶ崎、鯉ヶ崎、見立崎、
	その他	サンレンバヤシ、カガロ、申ヶ崎

図-3 アテ呼称が付与されている地形図(◎は漁師独自の呼称)

(ii) 相貌的知覚の特徴

前項では、アテ呼称の命名主因を明らかにした。本項では、その中でも「形態からの類推に基づく呼称」に着目し、彼らが陸地景に対し、何を連想しているのかを明らかにする。それら呼称の相貌特徴(連想する事物)を基に分類すると、「人体各部」と

「道具・もの」の二つに分けることができる。相貌特徴と使用される呼称を示したのが「表2」である。

「人体各部」とは、陸地景の形姿から人間の身体の一部を連想することである。その内訳を見ると、円錐峰に対し「頭」を連想した「ボンサン山」「カシラ山」があるほか、崎に対し「鼻」を連想した「ヤマハナ」、稜線鞍部に対し「股」を連想した「大マタ」、円尖頂に対し「コブ」、尖峰に対し「マヒゲ（眉毛）」を連想した呼称がある。このように相貌特徴に人間各部の名称が多い理由として、漁師の日常の生活で身近に見かけることができ、身体に関する語彙も豊富であることが考えられる。

「もの・道具」とは、陸地景から物理的な事物を連想することである。内訳を見ると、円錐峰に対し「傘」を連想した「カサホコ」や円小山に「鍋」を連想した「ナベ山」、方形頂に「テンジョウ」「イロリ」などを連想した呼称がある。これも「人体各部」と同様、漁師の日々の生活で見かける身近なものが対象となっている。

表-2 対象に対するの連想特徴

相貌特徴	使用される呼称例
人体各部	大マタ、ハナ、ボンサン、コブ、カシラ、マヒゲ
道具・もの	テンジョウ、カサホコ、イロリ、ツボ、ボタモチ

このように彼らは、陸地の景観に対し人間の身体や道具といった身近なものを相貌していることが分かる。相貌的呼称の付与された陸地景が、船の移動に伴って同じ地点から同じ形姿に見えるからこそ、彼らは湖岸からの距離感や方向感を確認できるのである。すなわち、船の移動と相貌知覚が動態的関係にあるからこそ、船上での正確な定位が可能なのである。

(iii) 船上からの陸地景認識体系

一連のアテ呼称の分析を踏まえ、本項では山アテ行為で使用される「陸地景の形状」とそこに付与される「漁師独自の呼称」との関係に着目し、視対象を契機とする相貌的語彙の多少差が、名づけ行為にどのような影響を与えているのかをしてみる。

船上から見て「山」型の透視形態に付与された呼称を見ると、円頂には「ボンサン」「カサホコ」「カシラ」「ナベ」といった呼称が付与され、円尖頂には「コブ」、尖峰には「キリカケ」「マヒゲ」といった呼称が付与されている。「山」型の透視形態に付与された呼称の8語すべてが「形態からの類推に基づく呼称」である。

一方、「崎」型の透視形態には、「蜷ヶ崎」「鯉ヶ崎」「見立崎」「申ヶ崎」「ヤマハナ」の5語の呼称が付与されているが、そのなかで前者3語が「その地点での出来事・故縁などに基づく呼称」であることが分かる。

これらの事例から「山」型の透視形態には、呼称に道具や物といった「もの」的表現がなされ、「崎」型の透視形態には、その地点での出来事や故縁といった「こと」的表現が多く付与されていることがわかる。著者が調査した限りにおいて、山型の透視形態には「こと」的表現が付与されている例はなかった。

これは「崎」に比べて「山」は、水上を生業の舞台とする漁師にとって、日々の生活や生業での関わりがないため、その地点での出来事や故縁が起りにくい。したがって、「山」型に呼称を付与する場合は、その形状を根拠にした相似の連想に依らなければならないと考えられる。

しかし、それ以外にも「視対象を契機とする相貌的語彙の多少差」が関係していると考えられる。

「図4」左段の「山」型には、「カシラ」「ボンサン」「カサホコ」というように、様々な「もの」に関する語彙が見立てられている。これは、人間側が持つ既知の語彙のなかで、「山」の形態から呼

び起こされる相貌的連想に基づく語彙が豊富にあることが起因していると考えられる。そのため「山」型の陸地景を前にしたとき、「もの」に関する語彙を容易に帰着させることができるのである。加えて、「山」型は円頂や円尖頂というように様々な形姿をしており、「山」相互の形状差が大きい。つまり、視対象に対し形容可能な既知の語彙が多く、また陸地景の形状差が顕著あるため、既知の語彙のなかからその陸地景固有の「もの」を容易に見立てることができる。そのため「山」型に付与される呼称には、「もの」的表現が多いと考えられる。

	「山」型	「崎」型
例	＜カシラ山＞写真①	＜蜷ヶ崎＞写真④
	＜コブ＞写真②	＜鯉ヶ崎＞写真⑤
	＜カサホコ山＞写真③	＜見立崎＞写真⑥
呼称	ボンサン山、カシラ山、コブ、ナベ山、カサホコ山、テンジョウ山、ボタモチ山	火焚場、蜷ヶ崎、鯉ヶ崎、見立崎
特徴	対象への相貌的連想に基づく呼称	その地点の出来事・故縁に基づく呼称
変化	「もの」化	「こと」化

図-4 陸地景に対する付与呼称の違い

図-5 船舶の位置とそこから見て取れる陸地景

一方、「図4」右段の「崎」型には、その地点の出来事や故縁に基づく呼称が付与されている。これら「崎」型に対し、その形状を契機とする相貌的な語彙を見立てることは容易ではない。これは、既知の語彙のなかで、「崎」型の形状から呼び起こされる相貌的語彙の少なさが起因していると考えられる。一部、「崎」には、その形状から「鼻（ハナ）」という連想を根拠とした呼称

が付与されているが、すべてに「鼻」という語彙を付与してしまうと、他と示差できない。また、船上から見て取れる「崎」はどれも一様に見え、「崎」相互の識別が難しい。

したがって、視対象の形状を契機として一言で表現できる相貌的な語彙が少ないため、呼称の命名契機は、その周辺での出来事や故縁に依ることとなり、呼称が「こと」化すると考えられる。

このように視対象から呼び起こされる相貌的連想に基づく語彙の多少差が、「山」型には「もの」的表現、「崎」型には「こと」的表現という付与呼称の違いを生じさせていると考えられる。上記をまとめたのが「表3」である。

表-3 「陸地景の形状」と「名付け」との関連

	「山」型	「崎」型
語彙	形状を契機とする 相貌的な語彙が豊富	形状を契機とする 相貌的な語彙が少ない
形状的特徴	周辺の地形に比べ 示差しやすい	周辺の地形に比べ 示差しにくい
使用呼称	対象の相貌的連想に 基づく呼称の使用	その地点の出来事・故縁に 基づく呼称の使用
呼称変化	「もの」化	「こと」化

4. おわりに

本研究は、船上からの景観体験、とりわけ山アテ行為に着目した認識論的研究であり、以下のことを明らかにした。

補注・文献

1) 山アテ行為とは、海上で働く人々が陸地の景観を利用して自船の位置を測定する手法。
2) 桜田勝徳 (1968) : 漁撈の伝統 : 岩崎美術社
3) 田中熊雄 (1960) : 大隈半島に於ける漁撈伝承 1 : 宮崎大学学芸学部紀要Ⅱ 社会科学 9, 157-215
4) 斎藤毅 (1988) : 漁業地理学の新展開 :

成山堂書店, 9-25
5) 斎藤毅・関信夫 (1980) : 山たてにみられる環境と知覚空間 : 地理25 巻 11号, 47-54
6) 篠原徹 (1995) : 海と山の民俗自然誌 : 吉川弘文館, 137-162
7) 五十嵐忠孝 (1977) : トカラ列島漁民の“ヤマアテ”「生態」(渡辺仁編) : 雄山閣出版
8) 斎藤潮 (1985) : 海岸景観およびその

体験の典型に関する研究 : 日本都市計画学会学術論文集 20, 391-396
9) 卯田宗平・笹谷康之 (1999) : 船上からの景観認識に関する研究 : 日本都市計画学会学術論文集 34, 433-438
10) アテ呼称とは、山アテ行為で用いられる呼称の総称。
11) インフォーマントは、平成 11 年度に沖島漁業組合員である現役漁師と古老を対象とした。

Summary : This study aims to clarify the cognition of landscape viewed from ship in the Lake Biwa, especially to make clear the relationship between the visual figures and naming of landmark, such as mountains and capes used “Yama-ate” action. We analyzed of words used “Yama-ate” action that are traditional method of orientation in fishery action on the sea. Fishermen oriented themselves using landscape viewed from ship before finding fishing spots. The results show that naming elements of landmark viewed from ship is a great difference between mountains and capes. A name of visual figure of mountains is based on the analogy of figures and outlines of landmarks, on the other hand, a name of visual figure of capes is based on an episode and happening about landmark. There is reason the difficulty in the analogy of the visual figures between mountains and capes. From these facts we could deduce the theory of cognition of landscape about the relationship between “the visual figures of landmark” and “naming”.

①漁師が使用する呼称とそれに伴う視覚的働きかけを手がかりに、陸地景に対する認識プロセスを考察した結果、彼らは陸地景に対し全体から部分へと視認範囲を絞り込みながら、船舶をより正確に定位していることがわかった。

②アテ呼称の命名根拠を分析した結果、彼らは、陸地景に対し人間の身体や道具といった身近なものを相貌しながら、陸地景をより簡易に認識していることがわかった。

③視対象を契機とする相貌的語彙が豊富な「山」型の透視形態には「形態からの類推に基づく呼称」という「もの」的表現がなされ、一方、対象を契機とする相貌的語彙の少ない「崎」型には「その地点での出来事・故縁などに基づく呼称」という「こと」的表現が多くなされることが分かった。このことから、視対象に対する相貌的語彙の多少差が「山」型と「崎」型に付与される呼称の表現に影響を与えていることを導き出した。

今後の課題は、以下の2点に集約できる。①海岸地形の異なる地域において、この種の実態調査を重ね、船上における景観認識の地域での共通性と相違性を導き出す必要がある。②「漁師が行なう陸地景への景観認識」と「一般人の景勝地などでの地形認識」とを比較し、本稿で明らかになった「空間の認識方法」が一般解となることを検証する必要がある。

謝辞 ; 本論文を執筆するにあたり、沖島漁業協同組合長茶谷力氏をはじめ、多くの漁業関係者に協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。なお本研究は、平成 12 年度文部省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費 10485) の一部を使用しました。